

ことりのすみか

匙

序

麗らかな春だ。

木々は生い茂って何もかもが瑞々しい。日に日に花が、芽が、枝葉が色を変えていくこの季節は只々眩しい。あまりの輝きに気が滅入るくらいだ。

晴れ渡った空は好きだったが、嶺二がこの季節を苦手とするのには理由がある。若かりし日を思い出すからだ。愛音と響と圭、それから自分。在りし日の今頃は早乙女学園に入ったばかりで、世界の全てが目映かった。不安ばかりのようであって、起こる全てに希望があった。仲間といれば、何も恐くないような気さえしていた。

思えば、カルテット・ナイト結成以降はその感覚が戻りつつあった。新人作曲家・七海春歌。楽しげに音楽を作る姿に感化されて、ぼくらも随分と打ち解けたし、「楽しい」ってことを素直に表現できていたように思う。あの藍が、誰かと組むのも悪くないと言っていた。翔や那月との信頼関係も含めて、心から活動に打ち込んでいるようだった。

だからこそ、何故きみがないのか分からないよ、アイアイ。

ユニットはメンバーが揃ってこそ活動できるものだ。だから、四重奏ではなくなったカルテット・ナイトは活動休止を余儀なくされた。

同じくユニットメンバーだった蘭丸とは、相変わらず仕事で組む機会が多かった。が、お互い藍のことを話題に出すのを避けている節がある。

歌謡祭のあと、不調を押していた藍は急遽休養を取ることになり、それっきりだ。見舞い先も、療養先も分からない。藍の担当していた後輩たちは嘘の吐けない面々ばかりだと思っていたが、この時ばかりは堅く口を閉ざした。その口を開かせようとは思えなかった。近しい人の急な不在で傷つくのは、自分だけではないのだ。

ひと月余りが過ぎても、やはり藍の姿はどこにもなかった。

今日の「まいど！アイドルらすがす！」の収録は、珍しくカミュがゲストだ。正直、気が重かった。三人揃えば、一人足りないことに気付いてしまう。事前にソロライブの打ち合わせに出た蘭丸は、収録直前に入りになる。持ち番組の台本に目を通せば、やはり自分たち三人の名前が並んでいた。足りない、と思った。

「寿、入るぞ」

硬いノックの音が響き、控え室のドアが開く。

「ぐっいーぶにんぐ、ミューちゃん」

「久方ぶりだな」

他愛もない会話だ。だが、彼も随分と柔らかくなった。氷のような美貌そのままに誰も寄せ付けなかったというのに。

そんなカミュが、今は名残雪のような暖かさではなく、吹雪くつぶてに打たれ忍ぶような顔をして、言う。

「……寿。美風が戻ってくるそうだ」

藍が。戻って、くる。

「まさか、」

「俺も信じられんが。早乙女がそう言っていた」

珍しく歯切れの悪い言い様だった。情報通の彼でも、把握していないことが多いのだろう。

「また四人で活動しろと。だから、……いや、ともかくこの収録が終わったら事務所に行くぞ。そこで明らかにすることも多かろう」

カミュはそう言つて、軽く手を振つて楽屋を出て行つた。建て付けが悪くないはずの扉がいやに軋んだ音を立てる。

ひりつく喉を振り絞つて返事をしたはずが、言葉も意味も、全て藍の再来の前に掻き消えて残らなかつた。

収録は、果たして滞りなく終わった。こんな状況でよくも無事済んだものだ。恐らくはカミュの機転によるだろう。常ならうつつに仕事などしたら大変な叱責をされるものだが、それも無かつた。

今、嶺二は、カミュと蘭丸とともに、手配された車でシャイニング事務所に向かつてい

る。後部座席に座った二人から、ちりちりとした緊張を感じて。

深夜の収録を終えて、通り抜ける街は黒々と重い。都心と言えど、夜十一時も過ぎれば店舗の照明もひとつふたつと息を潜める。あとは風俗店の看板や常夜灯ばかりが明るい。

タールのように粘つく夜だった。それは、連日真夏と錯覚するほどの気温のせいかもしれないし、或いは遠く飛んでくるというスモッグや砂のせいかもしれないかった。

運転をするマネージャーも、同僚も、自分も。誰一人として口を開かない。夜更かしな若者を煽るラジオは疾うに消されて、恐らくは一樣に同じことを考えている。藍の、ことをだ。

「おう、お前ら。悪いな、こんな時間に」

待ち構えていたのは、シャイニング事務所のトップアイドル兼取締役の日向龍也だ。

「ああ、日向さん。ちょうどよかった。三人とも揃ってますよ」

「いや、深夜に申し訳ない。あとは社長から話すそうなので、藤崎さんは上がっていただいて大丈夫です」

「ええ」

少し寂しげな、気に掛けるような表情でマネージャーはタイムカードを切って行つた。彼は、こんなバラバラな四人のことを根気強く見守り続けた人だつた。

足音が遠ざかると、誰とはなしに口を開いた。内容なんてひとつだ。

「日向さん、藍は」

「美風が戻つてきたというのは本当か」

「体調は？ 怪我とかはしてないんだよね？」

会議室のデスクに寄りかかる龍也に思わず詰め寄つたが、手で制される。

「まあ、待て」

矢継ぎ早に言葉を発する三人を留めて、ちらと扉に目を遣る。よくよく見れば、彼もそこはかとなく疲れているようだった。いつもぴんと糊をきかせているシャツも、僅かに襟がよれている。

「藍は社長室でおつさんと話してる。お前らが揃つたら呼べって言われてたから、それで会えるだろ。おい林檎、」

「はいはい。全く人遣いが荒いわよねえ」

ひよこりと林檎が顔を出し、ついてこいと手招く。いつも通りのやり取りだ。だが、そ

れこそが不自然だった。

華美な社長室に意味深なスモーク。これも恐ろしいくらいにいつも通りのシャイニング事務所だ。

果たして、美風藍はそこにいた。

碧い海のような瞳、目の覚めるようなパールエメラルドの髪。零れそうな大きな目は眠たげで、白い顔の中心を華奢な鼻梁が一筋。間違いなく藍だ。

だが、この違和感はなんだろう。まるで初めて彼を見たときのような違和感。波打たない水面のように平坦で静かな表情。そのうつくしい立ち姿のまま、藍はいやにゆつくりと瞬きをした。

「美風、息災だったか」

「うん。息災。新しいボディは何の障害も無い。ヒトでいうなら、健康そのものだね」

茫然と立ち尽くす嶺二に代わって声を掛けたのはカミュだった。続いて、蘭丸が口を開く。

「藍、お前まだ具合悪いんじゃないのか。何かおかしいぞ」

「異常は無いよ。まだ、前のボクのデータをトレースしきれてないのかな。他者には違和

感があるみたいだ」

新しいボディ。前の、ボク。目眩がした。まるで藍が藍でないような。

社長室には完璧な空調設備が調えられており、平時と変わらず暑さも湿気もなかった。なのに、ただ立っているだけなのに、力の入らない手には汗が滲み、背にも冷たいものが伝う。完全防音の室内にバスドラムを打つような振動が響く。いや、これは、心音だ。自分の、心音だ。

何か、何か言わなければ。

「おいおっさん、こいつら困惑してんじやねーか。手短かに説明してやってくれ」

口腔がいやに渴き、声を発するどころか、唇が張り付いて開くことさえ俟たらない。

「なーんと！ミスター美風はソングロボ……つまり、ロボットだったのデース！」

いつも通り仰々しい早乙女のセリフ。だから、冗談を、と思った。けれども。

「そういうこと。ボク、美風藍は、ロボットだ。今も、昔もね」

煩いくらいの心拍音の中で、その言葉だけが水を打ったように響いた。

どうやって帰ったのか記憶に無いが、事務所付きのハイヤーで各自帰宅させられたのだろう。気がつけばマンションのエントランスに立っていた。

ぼんやりとカードキーを差して暗証番号を打ち込む。常なら無意識にでも行える動作だというのに、システムは高い電子音を鳴らして嶺二を拒んだ。

『まあ、考えることも山程あるだろうが。今は美風が無事に帰ってきたことを祝ってやってくれ』

龍也の言葉が木霊する。考えることなんてありすぎた。ありすぎて、一番考えるべきことが見当たらない。とっ散らかった思考をぐしゃぐしゃと追いやると、やはり藍のことが浮かんだ。

二度目の暗証番号入力は緩慢に、今度こそ事務的ながら嶺二を受け入れた。

エレベーターの中は妙に明るい。目を細めながら、久しぶりに見た藍の顔を思い出す。

先に蘭丸とカミユを帰らせた早乙女は、更にとんでもない事実を告げたのだ。

美風藍はロボットで、モデルは嶺二のかつての親友・如月愛音。如月愛音は生きていた。

愛音とのリンクを切って、藍は壊れた。今の藍は、愛音と繋がっていない、新しい美風藍。声も、容姿も、藍は愛音を下敷きに造られた。……似ているはずだ、道理で。

混乱の中で真つ先に、愛音が生きていて本当によかったと思った。

当然のことながら葬儀は無かったし、行方不明として搜索されていた時期もある。そんな風に何の区切りもついていなかった自分がずっと願っていたことだ。それが叶ったのだ。嬉しくない訳が無い。

その気持ちが落ち着くと同時に、藍のことを考えた。

酷い話だ、と思った。かつての藍は、要するに愛音のための道具だった。その藍に愛音を重ねたことなど数え切れない。やるせなかった。

彼は、今度こそ、ただの美風藍として生きられるんだろうか。

相も変わらず、きらきらとした青空だ。明るくあれと背中を押すような天気が、嶺二の心境をまるっと無視して世界を照らす。今年の入梅は遅れそうだと、カーステレオからラジオのDJが告げた。

幸か不幸か、この日はラボへ足を運ぶように早乙女社長から指示が出ていた。まだ芸能活動を再開していない藍の様子を見に行くのだ。蘭丸とカミュは、既に会いに行つたと聞いた。

シャイニング早乙女の手掛ける事業は幅広い。早乙女学園はもちろん、一般的な高等学校や大学も、早乙女の学校法人の管轄にある。愛音の叔父である博士——あの若さで教授だと言う——の研究室も、やはりその大学の機械工学部に属しているらしかった。

新しいラボは以前より奥まった棟に位置していた。鬱蒼とした木陰を背負った、真つ白い建物。研究室のネームプレートはどんざいに書かれていて、読み取れない。配線が剥き

出しのインターホンは、ありきたりな電子音を鳴らして来訪を告げた。

「寿ですが」

「お待ちしておりました。藍さんはいま奥の個室にいますのでご案内します。如月博士は生憎退席しておりますが」

「うん、ありがとう」

セキュリティルームの入室キーがかしやりと鳴る。続けて、電子音。重たいその扉は、しかし、呆気なく開いた。

灰白い廊下をひたすらに歩く。北向きの通路は冷たく、リノリウムの緩やかな歪みがちらちらと灰色の光を反射した。奥へ行くほど建物脇の植え込みは森のように深く、緑の匂いが濃くなった。

「藍さんもきつと喜びます」

小柄な女性研究員が言う。

「……だといいな」

「寿さんに会いたがってましたから。さ、どうぞ」

からり。軽い音を立てて引き戸が開く。中学校の教室みたいな、木製の扉。味気ないべ

ージュの壁と、ウォームグレーの床を覆う夥しい量の機材と配線と資料の中に、藍は座っていた。

「藍さん。寿さんが面会にきたよ。よかったね」

「うん。アリガトウ」

「何かあつたら呼んでくださいね。コールボタンはここです」

「ダイジョウブだよ。心配しすぎ」

いつもの調子——と言っても、数ヶ月前の日常だが——でつんけんと研究員を押しやる。その姿に少しだけほっとした。

藍は白いパイプベッドの上で足を揺らしていた。瞬きもしない端正な顔が美しい。その瞳が、真つ直ぐ自分を見つめていた。

「……アイアイ、久しぶりだね」

「レイジだ」

「うん、嶺二だよ。寿、嶺二」

声も変わらない。愛音と同じ、でも僅かに硬いその声。

以前のデータ……記憶はサーバに残っていて、折に触れて、少しずつアクセスをしてい

ると聞いた。何度も照合して、今の藍の記憶に馴染ませていくとのことだ。

『一度に全部詰め込むと、処理が追いつかなくてクラッシュする恐れがある。前の藍のデータベースバックアップやログへのアクセスは、負荷を監視しながら処理させているから、お前にも協力してほしい』

龍也の言葉が蘇る。皆にそう頼んだの、と訊けば、どうやらそうではないらしい。取り分け負荷が掛かりやすい相手に念押ししていることは想像がついた。

無感情に塗りたくられた、生成り色の壁。薄ぼけたペールトーンの中で、一際鮮やかな翠が揺れる。藍は、まじまじとぼくを見つめて、やがて小さな小さな機械音をカシャンと立てて呟いた。

「……コトブクレイジ、知ってる。認証率、100パーセント。データベース照合、問題なし」
コトブクレイジ。そう、ぼくだ。

さつきは懐かしい声で呼んでくれたのに、データとして解析した情報が告げる名前は味気なかった。

「それって、どうやって区別してるの？」

「人物認証のこと？ ヒトとそんなに変わらないよ。顔認証と声紋パターン、容姿データ

との照合。あとはヒミツ」

ヒミツ。

藍は秘密だらけだった。ミステリアスアイドルという触れ込みもあったが、もちろんそんな単純な問題ではない。ごく一部を除いて、美風藍とは何者なのか、全く知らなかった。本人さえ、きちんと知らなかったとも言える。

そうして秘密も心も明かさずに消えた人間を嶺二は知っている。藍もそうやっていなくなつたのだと、痛いくらい覚えている。

あれは、ついこの間の冬だった。藍はなみなみと後輩たちへの愛おしさを湛えて、いっぱいに溢れそうな想いを零さないように静かに佇んでいた。

そんなことは、まるで夢だったかのようにあっさりとした言い種だった。

「レイジのことは博士からも、前のボクからも、……アイネからも情報を得てるから。よく知ってるよ」

「愛音から？」

「うん。今は接続が切れてるけど。アイネのことも全部データに入ってる。人物テーブルの中でも、一番詳細なデータになってると思う」

愛音。

「キサラギアイネ。ボクのモデルキャラクタ。ひとつ前のバージョンでは、情報と感情をリンクしていた。アイネはレイジの親友。ボクと……前のバージョンのボクとレイジは、心友」

「うん」

どこまできみは、美風藍なんだろう。言葉にすることは躊躇われた。

それが彼なりの記憶なのか、それとも記録なのか……はたまた、データでしかないのか。しかし何にせよ、心友であると、覚えていてくれたのか。

今度こそ、ぼくは誰かの友であり続けられただろうか。最後まで裏切らずにいらただろうか。そうであつたと信じたい。

胸につかえた想いで目頭が熱くなつた時だつた。

「ボクも、レイジと心友になりたい」

碧の眼差しが真つ直ぐに届く。くん、と袖を引く力は控えめだったが、揺るぎなかった。ああ、これは藍だと思った。根拠なんてない。ただ確信だけがあつた。

「……もちろんだよ」

「よかった」

震える声で返すと、藍の人形のような顔がふわと綻んだ。

それからしばらくは仕事のこと、事務所の仲間たちとのことを話していた。とりわけマスターコースの話に興味津々で、記録の照合とやらをしながら、しきりに嶺二の話に聞き入っていた。

「あの、寿さん」

盛り上がりつつきたところに、小柄な女性研究員が手招く。

「博士が呼びびです。お話中のところすみませんが、」

「ああ、はい」

もつと藍と話したかったが仕方がない。博士は、彼を生み出した張本人だ。今日は半ば彼に会うために来たようなものでもある。

「アイアイ、ごめんね。また来るよ」

「うん、バイバイ。またね」

軽く手を振って挨拶を寄越した藍は、思い出したようにパチリと瞬きをした。人を真似

て囀ることを覚えたばかりの小鳥のように。ニンゲンの動作として得心したかのような瞬きは、記憶の藍と馴染んで溶けた。

愛音の叔父、如月博士。藍のいる部屋の脇に、小さく「ソングロボプロジェクト研究室」と札が掛かっている。

「よう、元気だったか」

ざつくりと切った短髪に、度のある眼鏡。いまいち襟のしやつきりとしなないシャツと緩んだニットの上に、工学系だというのに何故か白衣を着ている。

しかし、その昔愛音の家に顔を出した時とそう変わらない容姿だ。この男、実は老けないのではないか。

そんな嶺二の疑問もどこ吹く風で、彼は淡々と話を続ける。

「聞きたいことがあるって顔だな。まあ、入れ」

聞きたいことは山のようにある。愛音が生きているなら、誰かしらが知っていてもいいはずだった。それを響も圭も、龍也ですら知らなかったというのなら、やはり容体は芳しくないのだろう。

そして、藍のこと。愛音の生き写しのような藍。彼をこんな風に造つたのは、どう考えたってこの男の作為だ。

知らなくてはならない。二人について。

景品で当たったようなマグカップを手に、助手が薄いインスタントコーヒーを運んできた。はつきりしない味を飲み干して、男の言葉を待つ。

「どこから話そうか。大体の経緯はシャイニングさんから聞いているかな」

「……ええ」

「とはいえ、それが俺の知っていることと一致するかは分からない。だから、簡潔に一から説明させてもらおう。」

まず、愛音は生きている。藍は、愛音をモデルにしたロボットだ。俺たちはソングロボプロジェクトと並行して、生命活動をしているが目を覚まさない愛音のために藍の知覚をリンクする試験を行っていた。だが、藍が無理やりリンクを切り、そのせいで深刻なエラーが発生した。エラーからシステム復元が出来なくなつたんで、新しいバージョンの藍を作った。これが概要だな」

この内容は、事務所での説明や、藍本人の認識と一致する。そもそも藍がロボットだという時点で嘘みたいな話ではあるのだが、それと同時にいやというほど腑に落ちる点があった。眠っているところを見ない、汗をかかない、飲食を極力避ける、水に入らない、――ぞつとするほど愛音に似ている。

「今の藍は、完全には前の藍じゃない。でも、愛音と藍が別人なのとは話が違う」

「どういうこと、ですか」

「パソコンで言えば初期化の状態だ。リストアって言えば分かるかな。細かい設定なんかを全部忘れてしまっている。

ただね、藍の根幹は同じなんだ。前の藍が守ろうとしたデータは、断片的にだけパッケージ化されて保存されていた。今はそれを少しずつ復元して戻しているところだよ」

専門的な話は分からない。だが、どうやら、藍はやはり藍なのだということらしかった。そのことに、酷く安堵した。筐体……いわゆるボディも、以前のを引き継いでいる。人間でいうならば、記憶喪失のようなものだという。

「新しいことを覚えるのと同時に、過去のことも思い出す。リカバリできない情報もあるだろうが、見守ってやってくれないか」

「そんなの……」

当たり前だと、言いたかった。けれど、愛音を見守ってやれなかったのもまた自分なのだ。口を噤むと、博士はひとつ溜息を吐く。

「……愛音のことを秘密にしていたのは悪かった。実を言えば、俺も整理ができてなかったんだ」

「すみません」

「お前が謝ることじゃないさ」

その言葉は、例え表面上だけだとしても救いだった。

「愛音は、海から救助された当初酷く衰弱していた。発見は72時間以内だったけれど、しばらくは生死の境を彷徨っていた。そのあとは植物状態でね……だけど、君や同級生の曲を聴かせると、脳波に変化があった。まあ、起きるのがイヤだったんだろ。困ったやつだよ」

きつと何度も何度も、彼は甥の名を呼んだだろう。蠅のような白い腕を取りながら。草臥れ果てた眼を分厚いレンズの下に隠して、どうすれば甥が戻ってくるか考え続けたのだろう。幼い愛音と、まだ若者らしさのある表情をした男の並ぶ写真が、資料や演算結果の打ち出しの下にちらりと見えた。彼の半生そのもののようなワークスペースだった。

「藍が音波君の曲を歌ったときも、君たちのユニットソングも。ええと、潮愛テンプテーションだっけ？ お前の曲も、愛音を揺り動かしたみたいだ。全く、早く戻ってくればいいのに」

乱雑な机の端に置かれた数枚のCD。その一枚をひらりと手に取る。それが何の曲かなんて、聞かなくても分かる。

「済まない。お前にも、藍にも。だけど、藍が人間らしく育って、愛音の命を繋いでくれたことに本当に感謝している。だから、もう、藍は……藍自身のために生きていいんだ」それは、彼の衷心からの本音に聞こえた。

結局、このオフは新しい藍を受け入れるための日になった。

夕暮れ時を告げるメロディがスピーカーから響き、博士も研究室飲みとやらの誘われて行った。あの偏屈な男も、何やら付き合があるのだと思うとほっとする。

赤い光の中で、振り向きざまに研究棟を見遣る。今は鴉色に染まっている白い箱のようなそれは、藍の住処には、あまりに寂しいと思った。

その日を切つ掛けに、仕事に加えラボに通う日々が続いた。はち合わせることはないが、蘭丸やカミユも顔を出しているらしく、時折洋楽の新譜や珍しい菓子や花が藍の部屋に増えていた。このまま茫洋と、時間だけが過ぎていくように思えた。

「なあ、お前は今後どうなりたい？」

ドラマで龍也と共演した折のことだ。クランクアップが同時期だった二人は、内輪の打ち上げを兼ねて飲んでいた。

高層階から東京の摩天楼が見渡せるバー。ガラスの向こうには、日々駆け回っている街が息づいていた。

「どうって……」

「未来予想図だよ、ビジョンってやつだ」

真夜中だというのに、星降る夜空より地上は明るい。

「如月は生きてる。美風は戻ってきた。いい事尽くじじゃないか。波に乗ってもいいと思

わないか？」

「波、ねえ」

グラスをぐるりと傾けて、蕩ける水面を眺める。本来ならば、大きな波に乗りたいたいと思うべきだろう。だが。

「ぼくは大きな波に乗って浚われるより、今ある穏やかな波に乗ってたいなあー、つて思うんですけどお」

「デカイ波に乗るだけの才能があるのに？」

「珍しいな、龍也先輩がそんなこと言うなんて」

彼は受け入れたものにはとことん寛大だ。だが、それは甘やかしではない。驚きと思わぬ喜びを、じわりじわりと黒いものが覆い尽くす。

「チャンスを掴まないやつに、この世界で生きる資格はない。だけど、お前は何かんだで必死に掴んできただろう？」

まあ考えておけよ、という龍也の横顔は有無を言わせなかった。遅かれ早かれ、その波とやらに乗ることになるだろう。

何も無かったから、もがいた。手に掴んだ大切なものは幾つも落としてきた。それでも

得難い何かを探して、ずっと高みを目指してきた。

その資格が、あるだろうか。目指す光に目が眩んで、同じ過ちを繰り返さないだろうか。

答えは出ない。結果はいつだって、振り返って初めて現れるものだ。

舌が痺れるようなスピリットを飲み干して、嶺二は本物と偽物の星が入り混じる夜景を見遣った。

季節は夏になろうとしていた。じつとりとした雨は霽れ、ぱりりと青空が広がる日。

事務所に集められた嶺二たちは待ちに待った宣告を受けた。

「さて。分かっていると思うが、今日はめでたい知らせだ！」

「カルテット・ナイト、再始動よつ。みんな、張り切つていきましょねつ」

何故かクラッカーを持った林檎がばんばんと中身を散らす。お遊戯会のように一列に並ばされたぼくたちは、大人しく紙吹雪とテープを味わった。

ちら、と目が合えば、藍はあのポーカーフェイスでもって淡々と言った。

「そんなわけだから、よろしくね」

美風藍はアイドルになるために生まれてきた。だから、これは当然のことなのだ。そう
は分かっている。でも懸念が先立つ。

「ちよつ……、早すぎませんか」

龍也に意見したのは蘭丸だ。

「ほう、愚民にしては思慮深いではないか」

「てめえ、俺はふざけていつてんじやねーんだよ」

カミュが揶揄すれば蘭丸が噛みつく。しばらく余所余所しかった二人も、藍が戻ってくればこの調子だ。藍は別段つつこみも呆れもせず、じいとやり取りを眺めていた。

「美風の復帰会見の日取りも決まったからな。ソロ活動よりお前らといった方が安心なんだ。ま、頼むぞ」

「日向さんにそう言われちゃ断れねえつすけど」

「頼まれるまでもない。美風も足手まといになどならんだろう」

「まあまあ」

諫めれば、ユニゾンでうるさいと怒られる始末だ。全く、この二人と来たら変わる様子がない。

「藍ちゃんお帰りなさい会もしましょうね」

にこりと林檎が微笑む。うつすらと涙を浮かべながら藍を抱きしめて。

「リンゴ、いたいよ」

「あら？ やあね、アタシったら」

愛おしそうに頬を包んで、額を当てる。何とも絵になる光景だった。

「いつでも頼ってね。あなたは一人じゃないわ」

自分だって仕事に追われていて、テレビで見ない日はない。そんなことは思わせない微笑みに、藍が笑みを返したように見えた。

「さ、そうと決まれば仕事仕事！ カルナイのスケジュールは社長とマネさんが詰めてるから、後で連絡が行くわよん」

ぱんと林檎が手を叩くのを機に、ぞろぞろと連れ立って会議室を出る。夜のラジオ番組の前に資料をチェックしたいと歩を進めると、ぐいと腕を掴まれた。振り向くと、藍がそこに居た。

「ねえ、美風藍ならどうするのが正解だったのかな」

微動だにせずにドアを見つめる彼は、何故だか悲しそうだ。

「なに、が」

「ランマルとカミュのこと。……最初は何も無いみたいに無視してた。イライラを覚えたらうるさいって注意した。でも、そのあとは」

記憶をなぞりながら、彼は言う。そうだ。時折、二人をからかうようなことも言っていた。以前は。

「ケンカするほど仲がイイ？ 似たもの同士？ ねえ、前のボクなら何て言ったのかな」

「……無理に、そうしなくても、」

「ウソ。レイジだつてそれを望んでる」

そんなことないよ、と言えればよかった。けれども、無理だ。

だって、嶺二はいつだつて藍が藍らしくすることを望んでいる。藍の言う通りだ。ただ、どう振る舞うのが藍らしいのかという答えは曖昧だった。彼が苦しくないように、素直にあれたらいいと思うだけで。

「ボクは……まだ、レイジの心友にはなれないみたいだ」

「そんなことない、」

徐々に弱る力を感じながら、今度こそ本当のことを告げた。何度だつて、ぼくらは心友になれる。嶺二のその気持ちに偽りはなかった。

「そうだいいけど」

引き留めていた手をついに離して、藍は微笑んだ。

ごめん、と振り絞る声を置いて閉められた扉を、嶺二は見つめることしかできなかった。

後輩たちが嶺二の元を訪れたのは、程なくしてだった。後輩といつても、嶺二が面倒をみた二人ではない。四ノ宮那月と来栖翔、それから七海春歌。いずれも、藍が指導した若者たちだ。

「すみません、お忙しいのに」

那月が淹れる紅茶の香りがリビングに漂う。事務所でアポを取ってまで訪ねてくる勇氣には感心する。嶺二としても聞きたいことはあつたし、好都合とも言えた。

「いや、いいよん。アイアイのことだろう？」

表向きは藍が面倒を見ている体ではあつたが、実のところ、後輩たちもまた彼を見守っていた。少なくとも嶺二はそう思っている。

「もう、カルテット・ナイトの皆さんはご存知なんですよね、美風先輩のこと」

「……うん。この前、聞いたよ」

何を、とはお互い言わない。探り合う落ち着かなさはあつたけれど、どちらも彼のことを考えている。詰る理由もなかった。

「黙っていてすみません。俺たち、みんな知ってたんです」

見ていれば分かったよ、とは言わなかった。伝えたい気持ちや悲しみを、じいつと我慢して寄り添う姿は痛々しいほどだったから。彼がどんなに愛されているか、手に取るように伝わってきた。

だから、こうして藍のことを相談できる相手ができたことは、彼らにとっても良いことに違いない。若者たちの言葉を待っていると、那月がふわりと告げた。

「あの、れいちゃん先輩。あいちゃんは、すつごくすつごく、れいちゃん先輩のことが好きなんです」

「へっ」

どきりとした。

ナツキは唐突なんだ。素直って言えば聞こえはいいけどね。そんな藍の声が浮かんで、零しかけたカップを慌てて支える。

「最近あいちゃん、元気がなくて。どうしたのって聞いたら、れいちゃん先輩と心友にな

れなくて悲しいって言ってたんです」

「ばつ、那月、おま」

慌てて翔が立ち上がり、ちらと様子を伺う。

「……そんなことないよ」

藍がなりたくない、というなら話は別だが。嶺二の心には、もう藍のための場所が出来ている。どんな風に違和感を感じようが、藍は藍なのだ。それを上手く伝えることができない。たった一人に伝わればいいのに。

「アイアイは大事な心友だ」

言葉にすれば、ひどく簡単なことに思えた。

「……あいつ、言っても聞かなくて。すみません」

「きみたちが謝ることじゃないよ。でも、ありがとね」

こんなにきみを分かって見守ってくれる人がいるっていうのに、どうしてばくなんだろう。自惚れと期待と、わずかに恐れが込み上げる。

「あの、藍は、時々腹立つこともあるけど」

「うん」

「本当に真面目で融通が利かなくて、正直なやつなんです。だから、嶺二先輩と仲良くなりたいっていうの、本当だと思います。俺も那月も、お互いなかなか口に出せないこともあるけど。ライバルで、仲間で、何故か伝わるっていうか……結局、嘘はつけないんです」

上手く言えなくてすみません、と締めた翔の言葉は剥き出しの直球だった。

「ぼくたち、あいちゃんがいちゃん先輩と仲良くなれたらうれしいです。きつと、なれると思うんです」

「そうかな」

「はい。だって、あいちゃんは、あなたのことが大好きですから」

「……ありがとう」

思えば、心友宣言をしたときだって、そこまで親密ではなかったのだ。けれども、憎まれ口を叩きながらも付き合ってくれる彼が愛しかった。

博識で歌も容姿も完璧で、でも意外なことを知らない藍。偏屈なようっていて、赤子のような無垢さで何でも知リたがる。愛音とは似ても似つかなかった。ふとしたときに重ねることはあつても、やはり藍は藍だった。そうして、今の彼もそう在り続ける。

那月の淹れた紅茶はとうに冷めていたが、薫りは褪せず嶺二の心を慰めていた。

程なくして、美風藍の復帰会見は行われた。対外的には体調不良による休養とリフレッシュを兼ねた扱いになっており、突然の休養へのお詫びと、芸能活動再開を正式に発表する場となった。

滞在先は全てトップシークレット。だが、万一に備えて綿密に手配された不在時のスケジュールは、全て早乙女と龍也の管理の下に口裏を合わせてある。藍がそれをインプットすることは造作もない。未成年者である藍への配慮もあり、会見は滞りなく進行した。

『突然お休みをいだだいて、大変ご心配をおかけいたしました。申し訳ございません。フアンの皆様、また関係者の皆様の暖かいお心遣いに応えられるよう精一杯励んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします』

メンバー三人で事務所に集い、藍の記者会見を見守る。いずれも僅かな空き時間ではあ

つたが、誰ともなくテレビのある部屋に集まっていた。持ち込んだ台本も資料も、部屋に入っては誰一人として目を通していなかった。

「これからどうなるのかなあ」

「あ？　なるようにしかなんねーだろ」

「まあそうなんだけどね」

いやに白い壁に囲まれて、画面の中の藍は少し弱ったように退出していった。

これからしばらくは張り込みも増えるだろう。元々特別な敷地に住むカミユには影響が少ないだろうが、問題は嶺二と蘭丸。それから、藍本人だ。

「おれは事務所寮の空き部屋でも借りるつもりだ。まあ……何日かにいつぺんはアパートに寄らなきゃなんねえけど」

「ぼくちんどーしよつかなく」

「埼玉帰んなよ」

「ドイヒー！　帰んないよ！？」

ぎやあぎやあと喚く嶺二を尻目に、カミユが席を立った。折り畳んだコートを腕に掛け、てきばきとスマートフォンを片手に扉を開ける。

「……私だ。この騒動が収まるまで、屋敷と寮を行き来する。……そうだ、手配を頼むでは」

一言も語らず行動に出た彼を見て、嶺二は肩を竦めた。全く、素直じゃない。自分も、仲間たちも。皆、藍のことが心配なのだ。

いつだつてまっすぐに、怖じ気ずに佇むその姿。いつかぼきりと手折られやしないかはらはらした。その撓むことのない背筋を守りたいと思う。

復帰会見直後からファンの喜びの声は絶えなかった。SNSなどでも一時トレンドワードに乗るほどだ。藍が戻ってきて嬉しいと、分厚い手紙に想いを託したファンも大勢いた。渋谷の大きなスクリーンを、手を取り合いながらじつと見つめていた少女たち。ラジオにコメントを寄せてくれた女性。たくさんの方が、自分たちを支えている。

「まいらす」へのメッセージで、四人がまた活動してくれるのが本当に嬉しいと綴ったファンがいて、嶺二は思わず言葉に詰まった。嶺二の気持ちそのものだったからだ。

嶺二くんも、蘭丸くんも、カルテット・ナイトが揃っているとても楽しそうだったから。だから、とても嬉しいです。丁寧なペン字で書かれたハガキだった。

願ってもいいのだ。嶺二の願いを、そのまま素直に受け入れてくれるファンがいる。それがどんなに大きなことか、嶺二自身も気づかなかった。このまま四人で駆け抜けていきたいという願いを、見届けてくれる人たちがいる。

読み上げながら泣き出しそうになった背中を、蘭丸が力強く叩く。思わず涙が零れて、そして笑った。蘭丸もスタッフも、誰も嶺二のことを責めなかった。皆が藍の帰りを待っていた。

今日の仕事は、珍しく神宮寺レンとの対談だ。彼が嶺二の主演ドラマのゲストになるということで、女性ファッション誌に掲載されることになっている。そのあとは衣装を変えて、同じ出版社のテレビ誌向けの撮影だ。

「やあ、ブッキー」

「レンレン久しぶり！ 元氣だった？」

すらりと高い背と、優雅な身のこなし。控え室で顔を合わせた後輩は、相変わらず二十

歳やそこらとは思えない佇まいだ。それと同時に、年相応の澁刺さと負けん気が潜んでいる。

「おかげさまで元気だよ。ところで、アイミーの体調はどうだい？ 無理はしていないかな」

「ああ、うん……ぼくもちよつと心配だけど。何でもなさそうなフリしてる感じかなあ」
「おや、とレンは片眉を上げる。」

「ふうん。みんながついているなら大丈夫だと思うけど。それじゃあ、ブツキーに伝言をお願いしようかな」

流石に藍の正体を知らないレンにあげすけに話をするわけにもいかない。嶺二の逡巡まで汲んで、なんでもないような顔でレンは言う。

「アイミーはひとりじゃないよ。ランちゃんもバロンも、ブツキーもついでる。もちろんオレたちもね」

「ばかり、と音が飛ぶような上等なウインクのおまけつきだ。
全くだと思った。美風藍はひとりじゃない。そのことを早く伝えたい。」

会見から明けて一週間、ようやくユニットの打ち合わせで集まる運びとなった。あんなに仕事でなければどうでもいいという風だった蘭丸もカミュも、早く四人で仕事がしたいという空気を隠さない。

藍はここ数日はろくに睡眠を取る暇もなく（実際のところ睡眠は必要ないのだが）、事務所寮の空き部屋に詰めつばなした。三人もやはり取材陣に追われながらスケジュールをこなし、息つく間もない日々が続いた。

ややぐつたりとした顔ではあるが、ようやく事務所に戻ってきた時にはお互いぎらぎらとした眼差しを交わした。

「ふん、貴様ら愚民どもは流石に疲弊しておるようだな。これから務まるのか見ものだな」

「抜かせ、てめえこそ海から上がった犬みたいな面しやがつて」

「何を」

「ああ？」

疲れていようがお構いなしだ。口火を切ったカミュに、やはり蘭丸が応戦する。

「あーもー！ どうしていい大人がすぐケンカしちやうのー！ ハイハイケンカだめだめ、両成敗だよー！」

最早諫めるのも面倒だが、これをやらないと所謂リアルファイトに発展しかねない。プロ意識とは何なのか今一度問いたくなるが。

二人に冷たい視線を浴びせられながらミーティングルームの扉を開く。と、藍がちんまりとソファに座っていた。怖気など見せることのない彼が、息を潜めるように身を硬くしていた。

「よお、藍」

「ご苦労だったな。恙無く済ませたではないか」

無言でこちらを見る藍から視線を移して、ちらり、とカミュが目配せをする。

「アイアイ……」

咄嗟に口から出たのは、呼ぶ声だけだった。それで十分だとも思えた。

藍が立ち上がって静かに扉を閉める。先ほどの緊張した面持ちを残しながらも、すこしほっとした様子だった。

「みんな、ごめんね」

ともかくにも、これでまた四人で活動できるのだ。どこか発表したからには何らかの活動をファンに返さねばならない。世間に対しての約束に知らず知らず身が引き締まるようだった。公に、藍の仲間なのだと思った。

ぐしやぐしやと蘭丸が頭を乱暴に撫でると、若干むくれながらも眦を下げる。いとおしい、と思った。

「お、お揃いだね。じゃあ始めようか」

ユニットのマネージャーが顔を出して、てきばきと手帳とノートパソコンを開く。それから事務所の年間スケジュールを机の上に広げた。

「さて、カルテット・ナイト復活おめでとう。それから美風くん、快復おめでとう。早速だけど、まずは復活コンサートの話から始めよう」

復活コンサートはドームでワンマン。後は日程調整と演出について詰める必要があるが、これは全員予想していたスケジュールだ。

「あとは事務所の大きいイベントには全部出てもらうつもりで、出来れば来年にはツアーだね。これはメンバーそれぞれのマネージャーにも話通してあるから、新規契約は調整入れるんで」

シャイニング事務所は「歌」に重点を置く、アイドル歌手中心の事務所だ。中でも大掛かりなワンマンツアーはスターの証明のようなものだった。俄然、力も入る。

「派手に行こう、皆君たちを待つてゐるんだからね！」

大まかに各自のスケジュールを洗って、手際よくユニットの仕事が入れられていく。細かい内容はまた担当マネージャーから追って連絡すると告げられて、短時間ながら充実したミーティングは終わった。

景気付けに飲みに行こう。蘭丸や馴染みのスタッフと盛り上がっていたところに藍が顔を出す。

「おつ、美風さん。元気？」

「俺ら飲みに行くけど、どう？」

「ばか、酔っ払いの相手なんか若い子にさせるもんじゃねえよ」

はは、と陽気な笑いが満ちる。そうは言っても、気心知れたスタッフだし、皆羽目を外しても常識の範囲内だ。藍が混ざることなど無いと知っていたが、帰りを喜ぶ面々ばかりだった。

と、おもむろに蘭丸が立ち上がった。

「おい、嶺二。お前、話あるんじゃないのか」

「え」

どすんと背中を押されてよろける。藍の胸元に当たって、支えられてしまった。華奢なようにでいて、びくりともしない。いてて、と呟きながら見上げた双眸は、ぎくりとするほど澄んでいた。

「レイジ、話って何？」

「アイアイ、あの、その」

具体的な話などなかった。心の準備もできていないし、ただ、嶺二の胸の内には、藍の帰りを祝福したい、感謝したいような気持ちが満ちるばかりだ。それを知ってか知らずか、藍は言う。

「ちやうどよかった。ボクも話がある」

思わず蘭丸の方を仰ぐと、猫の餌やりを終えたあのように手で促される。帰るべき場所へ帰れと、そういう仕草だ。

「……じゃあ、そうだな、ぼくんちくる？」

「うん」

思えば、二人だけで出かけるのは初めてかもしれない。バドミントンをするときも映画を見るときも藍は決まって春歌を連れてきたし（思えばアイドル二人で若い女性を連れ歩くなんて、不用心にもほどがあるが）、彼女の穏やかさや、ある種の天然ぶりに会話を繋げられていた。そうでなければ、翔や那月がついてきた。不測の事態に備えていたのだと、今では分かる。

事務所の地下駐車場に停めた愛車に乗り込むと、藍はきよろきよると車内を見回した。

「珍しい？」

「うん。基本的にバンとかが多いから。こういう個人的趣向に添ったタイプの車にはあまり乗らないよ」

丸みを帯びたツードアセダン。生産終了したものだが、一目惚れして買い付けた。色はアップルグリーンだ。

シンプルな座席に乗り込んでシートベルトを掛ける。程なくしてエンジンが掛かり、ピートルは夜の街へ飛び出した。

「燃費とか、良くないんじゃないの？」

「ん、そりやあ今のハイブリッドみたいにはいかないけどね。ぼくは長距離ドライバーでもないし、まだこいつも働けるじゃない？」

このカブトムシに出来る限りのドライヴをさせてやりたい。古き良き時代を見てきた車を愛おしむように、嶺二はハンドルを切った。

真夏の夜は短いけれど、湿気を含んでぐんと重く、それでいてどこまでも紺色に広がっていた。

デネブ、アルタイル、ベガ。夏の大三角形だ。この摩天楼の下ではビルに遮られて見つける由もない。ただきらきらと燦めく大きな星に見当をつけるばかりで、それでも夏が来たと思った。

「……レイジみたいだね、このクルマ」

「そう？」

何が、とは訊かなかった。実のところは、嶺二も多大に共感するところがあつて買ったからだ。それに藍が気付いたのであれば嬉しいと思つた。

湿度の高い空気は、まるでぬるい水の中だ。小ぶりの車体は泳ぐように飛ぶように夜を駆け抜けた。

三枚目だなんだと称されてはいるが、嶺二も芸能人の端くれだ。特にアイドルとして仕事を始めてからは、事務所からセキュリティ重視の部屋へ住むよう重々注意されている。

ならば蘭丸は何なのだと冗談交じりに問うたことがあるが、龍也曰く「お前は隙が多すぎるからダメだ」だそうだ。

それはさておき、嶺二自身もこのマンションは気に入っていた。近隣の植物園が一望できて、四季折々の気配が感じられる。幼いときに地元にあつた大きな公園を思わせるのだ。若干家賃は張るが、治安もセキュリティも申し分ない。

騒々しい本人の割に、嶺二の部屋はスツキリとしていた。明るい木目調の家具が揃えられ、落ち着いた空間に調えられている。

「散らかつてるけど、上がつて」

「……おじやまします」

きよろきよろと見回す藍が子どものようで、思わず笑みが零れる。

「誰かの家は初めて？」

「ううん。シヨウト、ナツキと、あとハルカの部屋なら行つた」

ユニット内で互いの家に行くことは少ない。蘭丸は仕事のこともあり嶺二の家にスタッフ共々転がり込むことがあるが、逆はほばない。カミユや藍に関しては全くだ。

人恋しくて後輩や仲間を呼ぶことがままある嶺二だったが、きつと藍にはあまりない経験だろう。

「そつか。いつかアイアイんちもお邪魔したいな」

「うん、いいよ」

藍の部屋はスタジオだと聞いたことがある。恐らく遊びにいくような雰囲気ではないだろうが、それも含めて丸ごと藍の生活だろうと思った。

「ところで、話つてなに」

そう言われてみれば、そもそものが蘭丸が嘯いたことに端を発したのだが。今さら何もないとも言えず、言葉に詰まった。

「あー……あれはランランの勘違いっていうか……　なんとなく、アイアイと話がしたいなとは思ってたけど」

「ふうん。そうか、レイジも？」

「え」

「ボクも話したいなって思ったけど、全然まとまらなくて。こんなのイレギュラーだよ。でも、今日じゃなくちゃダメなんだ、きつと」

とりとめのない話を厭う藍らしからぬ発言だった。が、彼はさらにイレギュラーとやらを連発してきた。

「レイジ、今日、泊まりたい。ダメ？」

聞き違いかと思った。けれども、なるほど藍は今まで秘匿すべきことがあつたからこんな提案をしてこなかっただけなのだ。その代わりやると決めたら必ずやる、遠慮なくやる傾向がある。

つらつらと話をして夜を明かすだなんて、セイシュンじゃないか。

「ぼくは構わないけど。博士とか、大丈夫？ ……いろいろ」

「聞いてみる」

この調子では無理やり説き伏せるだろう。案の定スマートフォンを手にした藍の弁舌は見事なもので、あつという間に会話が終了してしまった。

「うん、説得した」

セキュリティが、エラーが、充電が。生みの親の心配をよそに、少年は次々と論破していった。若干の不安は残るものの、その晴れ晴れとした面持ちにすつきりとしなないことはない。嶺二は博士への同情を追いやった。

「アイアイ、明日の予定は？」

「明日は午後からミーティングだけ。後はフリーの時間で作曲するつもりだよ」

「りょーかいっ。ぼくちんも午後イチからスタジオ入りだからちようどいいね。あ、ご飯まだだから軽く食べてもいいかな」

「うん。どうぞ」

小分けにした野菜ときのこをタッパーから空け、ソーセージと一緒にフライパンにオイルを引いてざっと炒める。ぱらぱらと旨味調味料とクレイジーソルトを塗して、手際良く皿に盛る。その間にジャガイモをシリコンスチーマーで蒸して、冷凍していたご飯を準備だ。

「レイジ、油多いよ」

後ろから小言が飛ぶ。ついでに冷凍していたからあげでも食べようかと思っていたが、伸びかけた手をそっと戻した。

予備バッテリーがあるから大丈夫だと言つて主張する藍は、結局一口ずつ嶺二の夕飯を頂戴した。どういう仕組みかわからないが、一応は飲食が可能らしい。

ゆつくり咀嚼しながら、彼は言う。

「ゴメンね。ボク、レイジに心配かけてたみたいだ」

思わず目を睜つた。高飛車とも取れる態度を取る藍にしては珍しく、今日は「ゴメン」の連続だ。

「ぼくも、もちろん心配したよ。でも、ねえ、アイアイ。ぼくだけじゃないんだ」

自分だけじゃない。蘭丸も、カミュも、後輩たちみんなも。きみを取り巻くすべての人が、きみを思っているよと、そう思う。これは嶺二の願いでもあるし、事実でもある。

「アイアイが名前を知らないファンの子だつて、アイアイのことを待つてるよ」

藍の真つ直ぐな生き方も、彼を愛する周りの人々の姿も、全部全部伝わっている。

人は怖いものだ。意識していなくとも、何処かで誰かが見ている。芸能人なんかやっていれば尚更だった。だけど、今ほど誰かが見ていてくれるのを嬉しく思うこともない。

「うん、……そう、だね」

「ぼくも、……ぼくたちも、待ってた。本当はずっと、アイアイが戻ってきて、四人で活動できたらいなって思ってたんだ。あのランランやミューちゃんがだよ？」

ユニットなんてとんでもないという顔をしていたのに。厳しいけれど、認めたものには情の深い彼らの背中を思い浮かべた。あのステージで共にした一体感をまた味わいたい。急に藍に告げるべき言葉が胸に落ちてきて、ああ、何で今まで気付かなかったんだろうと思った。他の何を置いても、これだけは告げなければならなかったのだ。

「アイアイ、戻ってきてくれて、ありがとう」

彼がここにいる、同じ夢を見ている。四人で同じ輝きを目指している。奇跡のようだった。

ただそれだけのことが、どれだけ難しくて稀有なことか。再び同じ舞台に立ちたいと、願っても赦されるのだ。藍が今ここに在ることに、嶺二は感謝した。

「レイジ」

しなやかな指先を取って握り締める。確かに、美風藍は戻ってきたのだ。

「ありがとう」

「……ありがとう」

天に向かって広げても透けることのないその手は震えていた。彼が何者であろうとも、美風藍なのだ。

言葉少なに夕飯を済ませ、嶺二が風呂支度をしている間、藍はじつとテレビを観ていた。自分の記者会見映像を観て「分析」しているのだろうか。どう見えたとか、どこを直すべきか、とか。普段なら言いがちの台詞は一言もなかった。

そうこうして寝る段になつて、客間のソファベッドを寝室に持ち込むことになった。眠らないから構わないと藍はいうけれど、それは出来なかった。だって、藍はひとりの人間なのだ。少なくとも、嶺二にとつては。

暗闇というのは不思議なもので、人の心を暴き出す。薄ぼんやりとした輪郭はなぜか淡い光を持つようで、後は声音と気配ばかりだ。今ばかりは正直になれそうな予感がした。

「なんかこういうの、修学旅行みたい」

「シュウガクリョコウ？」

「うん。……そつか、行つたことないか」

気になる女の子と同じ班になれて一喜一憂したこと。枕飛び交う夜や、先生の目を盗ん

で繁華街にいったこと。木刀を買って叱られた同級生。今でもありありと思い出せる。

「消灯時間すぎてもさ、こうやっておしゃべりするの。恋バナとか、噂話とか、怪談とか」
「学問修めてないよね、それ」

「あはは、ほんとだ」

形骸化つてやつだね。真面目くさつて彼は言う。

「ぼくくんは友達多かったからさつ、悪友とかの家に泊まつたりもしたもんだよ」

「……アイネはレイジンち、泊まつたり、した？」

「うん、夏休みにね。ひびきんやけーちゃんと一緒に、実家に來たんだ」

「いいな」

早乙女学園での生活はたった一年間だった。けれども、中学とも高校とも全く違う生活に心踊らせ、挫折もし、それでも前を向いていた。いつまでもあんな日が続くと思つていた。

途切れた絆を繋いだのは、他ならぬ藍だ。

「アイアイも、いつでもおいで」

藍は自分たちとは違う。だけど、それがなんだろう。過去を振り返つて、出来なかった

ことを惜しむだけなんて、そんなことはしたくなかった。これからいくらでも経験を積んで、楽しいことをたくさん覚えていけばいい。その場所に、願わくば自分がいればいい。

「いいの」

ちいさくちいさく、藍が身動きするのが分かった。

「うん、おいで。トモダチつてさ、そういうもんだよ」

彼が心を許せる友になれればいい。お互い遠慮なくぶつかり合えるような、そんな友でありたい。暗闇で探った手を繋いで、半ば己に言い聞かせるように嶺二は呟いた。

芸歴が長いとは言え、俳優としてはまだまだこれからだ。オーディションで勝ち取った愛読書のドラマ化の主演。それを皮切りに、大きい仕事も小さい仕事もどつと増えてきて、有難いことに全てを受けることは難しくなってきた。

龍也やチーフマネージャー、事務所の重役とも今後の舵取りを確認していく。コンサートが決まった今、合間にダンスレッスンやボイストレーニングも入れたいところだが、こ

れがなかなか難しい。

「朗報だ。お前にミュージカルのオファーが来てる。海外ミュージカル原作、日本版の主役級。どうだ？」

「ええっ！」

思わず立ち上がって企画書を見つめる。個人で面接とオーディションを行う体を取っているが、ほぼ監督の固めたキャスティングでいく意向らしい。もし断れば他の俳優に行くだろう。彼か、はたまたあの彼か。既に正式に主演として決まっている女優も、劇団上がりの新進気鋭の若手だった。

「寿くん、最近特に頑張ってたからね。声もいいし、演技も全身でやるから舞台向きだとは思ってたんだ」

「ただなあ、分かつてると思うが。これを受けたら他の仕事はほとんど受けられないぞ。カルナイのツアーも延期になるだろうし」

「あ、そっか……」

「悩むだろうが、お前の道だ。迷うくらい仕事が来るってのは実力の証拠だ。踏ん張りどころだぞ」

ぼん、と肩に手を置かれる。つい数ヶ月前、彼も同じように苦悩していたことを思い出す。

「カルナイのツアーはまだ草案だから、練り直しても大丈夫だよ。ファンの子を待たせちゃうけど、まあ、でつくなつて驚かせてあげよう！」

マネージャーは力強く背中を支えて、朗らかな声で言った。所属当時から世話になった人物だ。応えたい。そう思った。

恐らくは、半年も前なら一も二もなく即答していたはずだ。

「ああ、あと、生々しい話になるけど。スポンサーへの手配があるから返事は早めにね」
じゃ、また。軽く肩を叩いてマネージャーは去っていった。もうこの件は、後は嶺二が決心をするだけなのだ。

嶺二には、夢があつた。漠然としているようで、でも大きなかたちをもった夢。

人に夢を与える誰かになりたい。

それは愛読書の主人公役もそうだし、今回のこの役もそうだ。ずっと、そういう人間になりたかった。

それでも迷うのは、藍がいるからだ。戻ってきた藍と同じ舞台に立ちたい。カルテット・ナイトの四人で歌いたい。それは寿嶺二でなければできないことだ。

アイドルとして、俳優として、逡巡する必要なんてないはずだ。これは自分だけの問題じゃない。事務所が全力で背中を押してくれている。答えは、出ているはずだった。

四.

カルテット・ナイト復活コンサートの準備は滞りなく進んだ。大きな舞台があると決まればボイストレーニングにも熱が入る。

多忙な龍也に頭を下げて、基礎から高度なテクニックまで、ユニットソングに必要な全てを叩き込みました。最善の状態で臨みたい。それが今の嶺二を動かす全てだった。

歩みを妨げるものがあるとするば、それはやはり嬉しくも大きすぎるオフアアのせいだった。

龍也は察した上で指導に付き合ってくれたが、取締役として、早く答えを出せよと促すことも忘れなかった。

今日はダンスレッスンと、それからコンサートとの合わせがある。コーチの提案で蘭丸と嶺二は龍也直伝のハイキックを入れることになり、若干振りを直したりと調整が重なっていた。

後から入るカミュと藍を待つて、蘭丸は得意の椅子寝を決めている。その間に、先日渡されたミュージカルの資料を眺めていた。

（どっちも一緒に出来たらいいんだけど。器用貧乏がこなすには、仕事が立派すぎるよねえ）

さすがに重要書類はレッスン室には持ち込んでいないが、それとなく付箋を貼ったミュージカル雑誌を読み込む。ブロードウェイでの評価はどうか。どんな役者が演じているのか。どんな役どころか。脚本は、演出は。

一も二もなく、この舞台に立ちたい。この物語をつくりたいと思った。

「レイジ、おつかれ」

がちやり。大ぶりのサングラスと帽子を被った藍が顔を出す。やましいことはないのに咄嗟に雑誌を隠してしまい、怪訝な顔をされた。

「なに、それ」

「えっ、雑誌だけど」

「何の」

「演劇雑誌だよ、ホラ、久々に舞台観たいなつて！」

「ふうん。……何か隠してるんじゃないの、レイジ」

「へっ」

同僚とはいえ、当然この仕事の守秘義務はある。ライバルでもあるのだから、ユニツト以外の仕事にはお互い口を出さないものだ。

藍は彼らしくもなく、その壁を乗り越えてきたのだった。

「あ、ああ。ちよつと仕事がねー、受けようか迷ってるのがあるんだ」

本当は迷うものもない。こんな晴れ舞台をみすみす逃すなんて、愚か者のすることだ。

「レイジ、選んでる場合？ そんなことじゃこの先困るんじゃないの」

「……ッ、アイアイに言われたくないよ」

誰のせいだと、当たりかけて止めた。誰のせいでもない。藍の隣にいたいだなんて嶺二のエゴだ。

はつとして、おちやらけたいいつもの寿嶺二に戻ろうとしたが、藍はそれを許さなかった。

「どういうこと。ボクのせいで受けられないってこと？」

「そんなじゃないけど」

どうしてこう、道化の仮面を外してしまふんだらう。後悔したが、藍のまっすぐな瞳は嶺二の意図を掴もうと必死だった。思わず言葉に詰まると、ガタガタと部屋の隅で音がした。

「んだよ、声でさえぞ嶺二」

「あつ、メンゴメンゴ〜！」

興奮して声が大きくなっていたらしい。気がつけば寝ていた筈の蘭丸に叱られてしまった。不機嫌極まりない表情につい後退る。

「藍も。キンキン騒ぐんじゃねえよ。でさえ声はレッスンとか本番の時にとつとけ」

「ランマル、でも」

「カルナイさくん、すみません、カミユさんの仕事を押してるそうなので、とりあえず三人でレッスン再開だそうです」

藍はなおも言い募ろうとしたが、スタッフの声がけに遮られてしまった。

個々のダンスレッスンは上々だったが、いざ絡みのある振りになると急に気まづさが込み上げる。目配せをしながらポジションを変えていくと、藍の物言いたげな視線が否応なしに突き刺さった。まずい。

「うーん、なあにか今日の合わせ良くないなあ。何かあった？」

当然コーチにもそれは伝わっていて、嶺二の心中は穏やかではなかった。合流したカミユにもしつかりしろと目で叱られる始末だ。

「とりあえず十分休憩しようか。あ、藍くんちよつと振り確認したいから来て」

「はい」

藍がコーチに呼ばれると、待っていたとばかりにカミユと蘭丸が嶺二の元にやって来た。

「寿、貴様集中せんか」

「ごめん」

「プロなんだからビシッと切り替えろよ。あと藍と話つけろ」

「えー、なんもないよー」

半笑いで誤魔化すと、上から氷のような視線が降って来た。実際どう話をつけるのかと、考えても答えは出ない。

本当は簡単はずだった。そもそもユニット全体に関わることなのだから、藍だけでなく二人にも迷惑を掛けている。四人でいたいと思うあまりに不和を産み出しているのは自分だ。嶺二は観念して口を開いた。

「あゝ、……ちよつと大きいオフアアがあつて。考えがまとまったら必ず皆に言うから、待つててチョーダイ！」

「やつと言いおつたな愚民が」

「おれは中途半端なことするヤツとユニット組むなんざ御免だからな。やるならきつちりやれよ」

どきりとした。蘭丸はいやに勘がいいところがある。その上気が置けない。仕事柄もあるが、歳の近さや、互いの仕事に対する姿勢、それから全く違う性格というのも馬が合う要因かもしれない。要するに隠し事ができないのだ。

「あゝ……ランラン、なんか聞いてる？　もしかして」

「てめえがウジウジしてんのが気に入らなくて日向さんに聞いた」

「……ごめん」

「詫びる相手が間違つてんだよ」

「貴様の仕事に興味はないが、俺を巻き込むな。目の前の責務に全力を向ける」

二人の言うとおりだった。とにかく、何らかの形で肚を決めなければならぬ。一度決心すればレッスンは集中できたが、やはり明確な形にはならなかった。

その夜、また藍に部屋に行きたいと言われた。断る理由も持ち合わせておらず、押し切られるように愛車に詰め込まれる。

ミーティングには龍也もマネージャーも同席したため上手くフォローしてくれたが、その意図が藍に伝わらないはずがない。

スピーカーから流れるラジオは、ニュースだの社会問題だのを語り合っている。同じ世界のことなのに、とても遠いことのように思えた。

「レイジ、明日午前オフだよね」

「うん」

「泊まつてもいい?」

先に予定を抑えられては仕方ない。言葉を濁しながらも承諾して、藍を迎えることにした。

部屋の灯りをつけると、晩酌の名残が片付けられずに残っていた。最早隠しても仕方ないと思っていたのだが、改めて目の当たりにすると、やはり片付けるべきだったと反省した。少なくとも、藍の前では。

「アルコール？」

「ぼくちんもオ・ト・ナだから。悩める時にはお酒も飲んじやうよ？」

龍也の影響でウイスキーを嗜むようになり、自然とボトルが並ぶ。からあげにはビールだろうと思うが、琥珀色の酒をロックで舐める夜も嫌いではない。チェイサーにと置いた炭酸水は、すっかり泡が抜けていた。

「永遠の十九歳って言ってたくせに」

「あれは言葉のアヤってやつ」

だらしなさにか、はたまた他の原因か。藍はむくれながら濃褐色のボトルをぐるりと眺めた。

「レイジはずるいよ」

「……うん、」

「レイジが言ったのに」

きらきらとした大きな瞳が揺れる。澄んだ湖面のような色をして、さざめく。

「レイジが、ボクら心友になろうって、言ったはずだよ」

「アイアイ」

「ボクは前のボクじゃない。でもボクはボクだ。美風藍だ。アイネとの約束はボクの約束じゃないけど、前のボクとの約束はボクの約束でもあるんだよ。」

ボクはレイジの心友になりたい。だから、言って」

すらりとした指が嶺二を掴む。

こんなにも欲されている。だけれど、それは本当に自分の役目なのか。なぜ藍はこんなに自分に執着するのか、実のところ嶺二には分からなかった。その反面、自分が愛音のことを思い出しながら、過剰に藍のことを意識していることは認めざるを得なかった。

「大事だから言えないこともあるよ、アイアイ」

「言って」

「……」

「レイジが言ってくれなければ、ボクはきつと分からない。ボクはレイジじゃないから」
全くもってその通りだった。その口から出たものが本心かはまた別の問題として、願うばかりで口を閉ざしても自分以外にはわからないのだ。

「努力を、するよ」

「レイジ」

「だからアイアイも約束して。もう二度と一人でいなくならないって。ぼくがダメなら、他の誰かでもいい。お願いだから」

藍こそ、胸の裡を秘めずにいてくれたら。愛音が、もつと誰かに助けを求められたら。嶺二は気づかなかつた。気づかないまま二人ともいなくなってしまうのだ。

「アイアイも、頼ってよ」

あの時そういうべきだった。愛音の話を聞いてやるべきだった。自分のことしか見えなかった。愛音の頼りは自分一人になつていたらしいと気付けなかった。

二十歳にも満たない子供に何が出来ただろう、とも思う。嶺二を許さないのは、結局のところ嶺二自身なのだ。

「ボクは今レイジのことを考えてる、目の前のレイジのことを見てるじゃないか！……

レイジ、ねえ、君を頼るよ。だから」

凜とした声が張りつめて、弾けて、震える。この子はこんなに頼りなげな声をしていただろうか？

「だから、レイジも『ボク』を見てよ」

返す言葉は無かった。藍の悲痛な叫びに曖昧に頷いて、じつと押し黙る。いつだって藍の前では藍のことを考えていた。そう思っていた。藍が愛音と同じ轍を踏むことを怖れながら。

美しい額に影が落ちる。陶器のような乳白色の膚にふかくふかく眉間の皺を刻んで、憤りとかなしみを湛えた瞳を見つめる。こんなに傷ついても、かれはどこまでも美しいのだ。清廉潔白な魂そのものだった。

「……帰る」

「アイアイ、待って」

怒りに震えた声すら美しかった。不可侵の気高ささえあった。そうして、触れることすら叶わず華奢な手首はするりとすり抜けて夜の闇へ融けていった。

その夜、嶺二は決心をした。

行き先は博士のラボだ。とはいえ、藍を無理やり引き戻しにくくためではない。その前に何としても為さねばならないことがあった。

夜間の大学構内には殆ど人がいない。熱心な学生と、研究員。それらの作業する音が、真夏のじつとりとした紺色の闇に響く。

「愛音に会わせていただけませんか」

自分の夢の在り処を考えたとき、それは幼いころの憧れであつたり、子役時代の仕事であつたりした。けれども、今アイドルである自分の原点は、早乙女学園時代にあると言つて過言ではない。響と圭とは、藍との歌唱対決以降これまでのぎこちなさは解消されつつある。後は愛音だけなのだ。愛音の存在だけが時間を止めている。

「……見ない方がいい」

「会えるんですか」

博士はしまった、という顔をしたが、諦めたように話した。

「愛音は生きてる。けど、普通に生活出来てるわけじゃない。……意味が分かるかい」

少なくとも、春までは意識不明の状態だったはずだ。だから、おそらくは会話など出来

ないだろうと思っていた。それでも会いたいと思った。しかし。

「ようやく少し体が動かせる程度だ。リハビリも根気強くやらなくちゃならない。今のあいつは骨と皮みたいな有様だ。愛音もお前も、堪えられるのか」

「……意識があるなら、なおさら、ぼくは愛音に会わなきゃ、」

愛音はついに意識を取り戻したという。そうであるならば、嶺二がすることは一つだ。ほんの少し、もう少しでも言葉を交わすべきだった。だけどそれは後悔に他ならない。時間は戻せない。だから、今出来ることをやるしかないのだ。

「……愛音の体力次第だ。あとは精神状態。それを鑑みて、無理そうなら諦めてくれ。いいな」

「はい」

愛音が生きていると聞いて、いつかは会わねばならないと思っていた。互いを許すために。嶺二の止まった時間を動かすのが愛音ならば、愛音の時間を動かすのもまた嶺二の役目なのだ。

その場所まで連れてきてくれた藍のために、二人は向き合わなければならない。

恐らくは許可されないだろうと思っていた愛音との邂逅だが、それは博士の立会いのもとあつさりと訪れた。

「面会はひとまず三十分限りだ。それと、愛音の体調次第ではすぐに終了してもらう。いね」

「はい」

どういう構造なのか、研究室の奥の壁に扉が現れる。無言で席を立つた男の背中を追うように短い通路を抜けると、業務用なのか飾り気のないエレベーターがある。その中に乗り込んで、やはり会話もせず目的地向かった。どうやら、エレベーターは地下へ向かっていくらしい。

簡素な内装に反して、乗り心地は非常によかった。繊細な機材を運ぶためだろうか、ほとんど揺れを感じさせない動作に驚く。そうして開いた扉の奥、

「あい、ね」

たくさんの管に繋がれて、痩せ衰えた如月愛音がそこにいた。お互いに決心して会うと

決めたはずなのに、嶺二の足は疎んだままだったし、愛音は萎えた足で思わずベッドの上を後退った。

「愛音、よかった、ほんとに……生きて、」

ずっと時を止めていた、嶺二の中の彼。記憶の彼は、高潔で妥協を許さず、けれどもどこか儚かった。

まるで違う。若くふつくらとした頬は削げて痛々しいほどだった。この変容こそが、彼が今生きている証だと思った。妄想でも幻覚でもなく、愛音は帰ってきたのだ。

「……愛音。寿くんに会いたかったんだろう」

寝台の上で震えながらも、必死に頷く。ぼんやりとした照明の中で泣く愛音は、思い出の気の強い彼とは似ても似つかない。

いや、知っていたはずだ。同室で過ごす日々のなかで、幾夜も声を殺して泣く彼の弱さを、本当は知っていたのだ。

自ずから足が向いて、そつと薄い肩をさする。

「れいじ、……ごめんね、ごめん」

「謝るのはぼくの方だ」

「ちがう」

この塞れた腕のどこにと思うような力でしがみついて、愛音は泣いた。あの時もこうすれば良かった。こうするだけで良かったのだ。鈴を振るような声は掠れて、瑞々しかった肌は乾いていた。けれども、確かに愛音だった。

「心配させるつもりじゃなかったんだ、ただ、もう、どこかに消えてしまいたくて」
「うん」

「ごめん、ごめんね、ごめんなさい」

「……いいんだ」

これ以上何を望むだろう。誰にもどうにもできなかった。それでも愛音は生きている。生きて、こうして心を通わせることが出来る。

「愛音。ありがとう、」

生きていれば、新しく始めることが出来るのだ。嶺二はようやく愛音の肩に頭を預け、熱い涙を零した。全ての澱が、解けていくようだった。

愛音のリハビリに付き合うこと数日、研究室に藍が訪れた。緑陰は廊下の窓からこぼれ、濃紺の陰翳をつくる。無機質な白い建物に夏のひかりが乱反射して、その中に立つ清純な翠が眩しい。

「……メンテナンス、来ただけだから」

「そっか」

「じゃ、ね」

明らかに気まず気な仕草に、思わず手を取る。彼は困惑した様子で嶺二を見遣った。

「なに」

「アイアイ、ごめん」

「別にいいよ」

そそくさと去ろうとする腕は逃がさなかった。今手を離してはいけないと思った。警鐘に従い、つよくつよく指に力を込める。

「レイジ、なに」

「あの……アイアイ、その、ごめん。今度こそ、聞いてほしいことがあるんだけど」

藍が僅かに身動きをしたのが伝わってきた。迷っている。彼を不用意に傷つけたのだ、当然だ。だけど、だからこそ伝えなければならぬことがある。光射す床に強いコントラストが生まれ、迷彩のようなその中でばさりと睫毛の羽搏きが耳に届く。

「時間、作れる？ 今日じゃなくてもいいから」

「……分かった」

身を引く力が弱まったのを感じて安堵する。きつく握った手を解けば、藍は軽く溜息を吐いた。

「明後日。明後日の夕方なら空いてる。ボクもレイジも」

「ありがとう」

上手く笑えたかは分からなかった。しかしながらほつとする。これは藍がくれたチャンスだ。

もう逃げない。過去に囚われて立ち止まるのは、誰をも幸せにしないと知ったのだから。

夏至も疾うに過ぎて、長くなつた昼は徐々に宵闇の燈をちらつかせる。事務所のスタジオで作業をしていた彼を迎えに行けば、待っていたとばかりに支度をした。

「アイアイ、お待たせ」

「うん、待ってた」

「今日は、……ぼくんちでいいかな」

「分かった」

連れ立つて歩く地下駐車場はしんと冷たく少し黴臭い。エンジンを掛けてゲートを
出ると、一変して夏の熱気と、落ち掛けた陽の長い影が広がった。

「愛音に会ったんだ」

藍はじつと耳を澄ましていた。いや、聴いているのかどうか、嶺二には分からなかった。
窓の外を眺める頬の線はゆるやかに溶ける。

「……アイアイのお蔭で、ぼくも愛音も未来に進めるんだと思う。だから、ねえ、きみに
聞いてほしいことがある。上手く伝えられるかわからないけど」

やはり返事はなかった。僅かに覗く睫毛が瞬いたような気がして、それで全てだ。そんな車内の様子はお構いなしに、ビートルは二人を乗せて進んでいく。

部屋に入るまで会話もなく、藍はおとなしく嶺二について歩いた。冷蔵庫から微炭酸のミネラルウォーターを取り出し、グラスに注ぐ。

「アイアイ、ありがとう」

「どう、したの。いきなり」

ベランダに面したリビングで、藍は行儀良く、あるいはやや身を縮こませて座っていた。

「何が、つていうか。アイアイがいてくれて、ぼくと心友になってくれてよかったと思うんだ。……ありがとう」

「……うん、」

「アイアイがまた心友になってくれて、本当に嬉しくて。舞い上がったのかな。……ずっと、ずっとカルナイだけ出来ればなあっておもっちゃったんだ。ダメだね」

醒めない夢のようだった。けれども、それでは駄目なのだ。愛音も、藍も、現実なのだから。

「……ぼくはね、怖いんだ」

夕暮れが藍の頬を照らす。大きな瞳は、今は明明と空の色に染まっていた。

「この一瞬が無くなるのが怖い。また大事なものから手を離してしまうのが怖い」

「レイジ」

一瞬の輝きに目が眩んで、もつと大切なものを見失ったら。喪失の予感が嶺二を疎ませる。喪失と栄光はいつも裏返した。

「ボクらは、ボクはアイネじゃない。違う、アイネもボクも……ボクは、もう二度と、いなくならない」

あかく燃える瞳は、まるで命の炎の灯るようだった。

「うん」

それがいつか潰える嘘でも、今この一瞬だけは真実だった。そうだ。願うこの瞬間は、確かに真実なのだ。そして間違いなく、掛け替えのない友は帰ってきた。

キンと冷えた空がオレンジ色に染まっていく。西に蕩けた太陽は、間近に浮かぶ雲の輪郭を燃やすように照らしていた。そろりと流し入れたカクテルのような曖昧な境界線にゆらゆらと昼と夜が揺れる。

じきに日が沈む。

「だから、ボクを信じて、レイジ」

朝が来ることは疑いようがない。それがどんな朝であろうとも。幾度夜が訪れようとも、明けない夜はないのだ。

いよいよカルテット・ナイト復活コンサートも本番を残すのみ。今日は最後のリハーサルだ。

気がつけば、真夏の太陽がそこにあった。季節は移りゆく。燦燦と照らす光が会場のシエルエットを浮かび上げていた。

スタッフが慌ただしくチェックを進める中、四人の周りには感慨に似た、ゆつくりとした空気が流れていた。

「あのさ、皆に聞いてほしいことがあるんだ」

周りの喧騒は邪魔にはならなかった。横並びでステージを見上げながら、嶺二は言う。

「もう知ってるかもしれないけど、来年やるミュージカルのオフアールが来てるんだ」

意外そうな顔をしたのは藍だけで、カミュも蘭丸も至って平然としていた。

「……ミュージカルのオーディション、受けようと思う。皆やファンには申し訳ないけど、必ず大きくなつて、待たせるだけのステージにしてみせるよ」

この答えを導き出すまでに、いや、その道程をなぞるために、どれだけの人の支えがあつただろう。期待に応えたい。応えられる自分でありたい。そうして、待つてもらえるような信頼を持てる人間になれただろうか。

「おし、よく言つた」

「愚民の割には適切な判断ではないか」

「みんな」

「大体でめえがいなくらいでダメになるおれらだと思つてんのか。腕磨いてくるから待つてろ」

激励の言葉に、思わず涙が溢れた。スタッフの合図に円陣を組んで、目元を拭いながらリハへ飛び出していった。出来はもう、言うまでもない。

開演まであと十分。舞台袖で開幕を待つ藍を掴まえて、嶺二はもう一度感謝の気持ちを述べた。

「アイアイ、ありがとう」

「お礼を言われるようなことはしてないよ」

「そうかな。でも、ありがとうって気持ちなんだ」

「そう」

藍は少し考えて、それからあのまつずぐな海色の瞳を瞬かせて、言った。

「ボクが新しいボクになつても、皆、待っていてくれたでしょう。だから、レイジもいつでも帰っておいでよ。ボクらのところに」

驚くほど晴れやかな笑顔に、思わず嶺二は藍を抱き締めた。ここが、ぼくの帰る場所なのだと、心からそう思った。

いたいよ、と呟く藍の顔は見えなかったが、ひどく優しい顔をしていることが分かった。カルテット・ナイト復活の幕が、あと少しで上がる。

季節は移り変わる。冬から春へ、春から夏へ。そうして巡りめぐる中で、自分にとって変わらぬ群れ、変わらぬ栖があるとしたら、きつとここなのだ。

いつの日も絶えることなく歌い続ける、小鳥の栖のように。

Utano Prince Sama - unofficial fanbook #02

Reiji x Ai / Novel

2014.3.9 presented by hitosaji

ASエンディングで一度消えた藍のこと、その時にユニットを組んでいた嶺二のこと、
考えると本当に堪らないです。

どうかふたりが心友であり続けられますように。

形にできてよかったです。

お読みくださった皆様、本当にありがとうございます。

「ことりのすみか」

2014.3.9 初版発行

発行：ひとさじ（匙）

連絡先：emo5o3@yahoo.co.jp

サイト：<http://5o3.main.jp/hitosaji/>

pixiv：7324652

印刷：PrintWalkさん

本書は個人的な二次創作作品です。

原作者・企業および関係者・団体各位との関係はありません。

禁 無断転載・無断アップロード・ネットオークション

This book is a personal fanbook.

It has no relation with the official works.

DO NOT copy, DO NOT upload, and DO NOT re-sell in internet auction.